

# 佳 作

## 2127 年古希老人日記抄

氏 名：入江 一友

職 業：日本エネルギー経済研究所

### 2127年1月1日(水)

昨年12月に満70歳を迎え、誕生月末の12月31日をもって一切の役職から退いた。昔風に言えば70歳は「古希」だが、いまだき70歳など珍しくもない。もともと、50歳代・60歳代で亡くなった友人知人を思えば、この歳まで生きられたことをよしとしなければならないが。

福祉制度上は80歳にならないと高齢者として認めてもらえず、今はまだ「准高齢者」なる見習い扱いで、年金も出ない。そうは言っても、体力気力の衰えを自覚すれば、老人には違いない。古希老人である。

引退しても呆けないように、日々思うところを日記に付けることにした。題して「2127年古希老人日記」。いつまで続くものやら。

老後の趣味に俳句を始めることにした。できるだけ一日一句、この日記にしたためていこう。

午後散歩に出たら、珍しく門松を飾った家があった。

門松やおもへば一夜七十年

### 2127年4月1日(火)

新年度を迎えたといっても、隠居の身、特に変わりはない。

近所の公園まで散歩に出て、桜の樹を眺めてみたが、蕾はまだ固く、咲く気配は無かった。昨年の開花時期は結局4月末になってしまったが、今年も同じだろうか。

子供の頃は、開花時期が年々繰り上がって、学校の入学式はおろか、卒業式も花は待ってくれなくなりそうだと言われたものだ。それが、今では4月中に咲いてくれるかどうか、心配されるありさまだ。

21世紀の後半から太陽の活動が不活発になったとかで、日射量がめっきり減った。天文学者や地球物理学者はいろいろ議論しているが、原因はよくわからない。17世紀・18世紀ころに地球が寒冷化した小氷期があり、今回はその再来という説もある。本格的な氷河期ではないそうだが、寒冷化の傾向は人心を暗くさせる。

20世紀の終わりから21世紀前半にかけては、石炭・石油などの化石燃料の消費に伴う二酸化炭素などの温室効果ガスが地球を温暖化させ、気候変動の諸問題を引き起こすと予想されていた。どうやって化石燃料の消費を減らすか、世界的に大議論が行われた。

ちょうど100年前の2027年に亡くなった私の曾祖父は、政府でエネルギー政策に関わり、退官後はエネルギー問題の研究に携わった。その息子、つまり私の祖父の思い出によると、曾祖父は「人類の活動で本当に地球全体の気候が大きく変わるとは思えない。大自然、大宇宙の営みは人間が左右できるほど矮小なものではないのではないかと、地球温暖化には懐疑的だったそうだ。もともと法律や政治学を勉強した文科系人間で（私もそうだが、祖父・父はともに理工系なので、私は曾祖父からの隔世遺伝かもしれない）、科学的根拠を自ら示して反論することはできなかったようだが、少数派の懐疑的科学者の著作を読んで、紹介していたらしい。曾祖父が生きていたら、現在の寒冷化を見て、「我が意を得たり」とつぶやいたのだろうか。

さまざまの事忘れてたり桜哉

## 2127年7月21日(月)

夏の盛りのはずなのに、地球寒冷化のためか、今日も涼しい。肌寒いほどである。コトンのカーディガンを取り出して着込んだ。自分が子供の頃は、夏は最高気温が毎日30℃を超えるのが当たり前だった。最近は30℃を超える日などまったくない。

地球温暖化議論華やかになりし頃、化石燃料の中でも特に二酸化炭素排出量が多い石炭は嫌われ者で、いつか欧米では石炭火力の新設が事実上禁止され、新設する場合には排気から二酸化炭素を回収して、地中に貯留したり、何らかの形で再利用したりする炭素回収貯留(CCS)あるいは炭素回収利用(CCU)が義務付けられたという。

現在では地球寒冷化を少しでも緩和するため、石炭火力の新設が推奨され、石炭火力発電所の製造建設能力を残した日本のメーカーにはビジネスチャンスが到来している。欧米

系のメーカーは全面撤退しており、日本、中国、インドの三つ巴の争いとなっている。それを思えば、石炭火力禁止など夢のような話だ。

CCS、CCU を思い出したのは、今朝のインターネットニュースで流れていたヨーロッパからの報道のおかげで、現在かの地では、前世紀に地中に貯めていた二酸化炭素を掘り出して大気中に放出する作業が進んでいる由。二酸化炭素噴出による酸欠状態を防ぐため、酸素マスクを着けた作業員が慎重にドリルを回す画像が流れていた。ヨーロッパの政策当局者は「前世紀に二酸化炭素を貯蓄していたのおかげで、現在の寒冷化対策のため再利用できる」と胸を張っていたが、その言い分はどうだろう。地中に貯めるための無駄なエネルギーを使わず、その分の石炭を残しておいてくれたほうが良かったのではあるまいか。

石炭資源は豊富にあるとはいえ、かなり採掘が進んできて、すでに露天掘りの炭鉱は掘りつくし、坑内掘り炭鉱では採掘現場がどんどん深くなっていると聞いた。ヨーロッパやオーストラリアでは品位の低い褐炭をどう活用するかが課題のようだ。含有水分が多いので、発電効率が劣るそうだが、使わない手はあるまい。

しかし、褐炭を含めても、いつまでも石炭があるわけではなく、石炭代替資源が必要だろう。風力発電は適地をあらかじめ開発しつつ、出力変動を調整する電力貯蔵設備の技術革新もなかなか進まない。太陽光発電は、寒冷化による熱需要増大により太陽熱温水器が見直されて、民家の屋根の上から駆逐されつつあり、砂漠地帯以外では競争力を失いつつあると報じられていた。

救いは水力で、地球寒冷化で積雪量が増え、水力発電に利用できる川の水量の比率（「出水率」と呼ぶそうだ）が上がってきているという。大昔の呼び方で言えば、「炭主水従」ということか。

けし炭に薪わる音かおののきつ

炭の連想で一句ひねったが、考えてみれば冬の季語で、季違いになってしまった。

## **2127年9月26日(金)**

「収穫の秋」というが、今年も冷夏だったせいで、農作物の出来具合は芳しくないという。米も不作で、国内消費量をまかなうのがやっとの見込みだとか。日本酒党としては、

米不足で酒の醸造量が減ったり、原料価格高騰が製品値上げにつながったりしなければよいと願っているのだが。

現在、日本の人口は約3,500万人。鎖国して自給自足だった江戸時代とほぼ同じ水準である。私が生まれた21世紀半ばは人口減少のまっただ中で、このままでは日本は滅亡するとまで囁かれていたが、世紀後半に入ってから人口が安定し、3500万人前後で推移している。両親は私が生まれた後、第二子を設けるかどうか、ずいぶん悩んだそうだが、妹が生まれ、私も妹も二人ずつ子供を授かったので、我が家系は人口を単純再生産していることになる。これも総人口安定化の一助と言ったら言い過ぎか。

いずれにせよ、江戸時代の人口水準に戻ったおかげで、国内の農地だけで食料の大部分をまかなうことができ、自給率は大いに高まった。一部の農産品は日本の主要輸出品目になっている。

ただし、この気候不順で不作の年も多く、品目によっては緊急輸入しなければならない場合もあって、不安は拭えない。

約1世紀の昔、地球温暖化が騒がれていた頃には、大気中の二酸化炭素を固定するバイオ燃料が、温暖化を促進しないためではやされ、ガソリンなどへの混入が勧められていた。トウモロコシやナツメヤシなどの農作物からもバイオ燃料が作られたことがあるという。しかし、いつぞやこの日記にも書いたエネルギー研究者の曾祖父は、貴重な農地や淡水資源を使ってバイオ燃料作物を生産することに批判的で、むしろ森林の間伐材を有効利用するウッドペレットを推奨していたとのこと。

曾祖父が八ヶ岳のふもとに建てた小さな別荘でも、ウッドペレットを使ったストーブを入れていたという。建物は2度建て替り、ストーブはもっと代替わりしているが、今でも我が家の八ヶ岳山荘ではウッドペレットのストーブを愛用している。夏でも朝晩ずいぶん冷えるようになったので、8月に逗留した際も世話になった。一緒に湯も沸かせるので、便利だ。

近隣の林業振興にも少しは貢献できたはずと喜んでいる。ただし、寒冷化で山林の植生にも変化が生じつつあり、従来の樹種の間伐材は手に入りにくくなった由、地元のホームセンターで聞いた。樹種が変わっても、ストーブは使い続けられるそうだが、自然の変化には驚かされることが多い。

湯沸しの下焼立る夜寒かな

「夜寒」の季語では晩秋の句になるか。

## 2127年9月27日(土)

昨日、バイオ燃料に関連してウッドペレットのことを書いたが、輸送用バイオ燃料についても付け加えたほうが良いだろう。昨日書いたとおり、トウモロコシやナツメヤシといった農作物からのバイオ燃料生産は成り立たなくなったが、油分を生成する藻類からのバイオ燃料は実用化された。淡水で生息する藻類の場合は、淡水資源の制約や陸地で生息池を造成する問題があったが、その後発見された海藻類の場合は、海面で養殖できるので、大幅な生産拡大が可能となった。全世界的に石油がほとんど枯渇し、天然ガスの確認埋蔵量も減りつつある現在、海藻類バイオ燃料への期待はさらに高まっている。

もともと、昔に比べれば、輸送用燃料への需要は落ちている。世界の人口自体が減りつつあるし、自動車は自動運転により輸送の効率化が図られ、輸送距離が毎年短くなってきている。在宅勤務が主流となったことも大きい。私自身、会社員生活の最後の十年間は、会社への出勤は週に1回だけだった。

航空機燃料の需要も落ちてきている。前世紀の半ばぐらいまでは、経済活動のグローバル化が叫ばれ、人々は世界中を飛行機で忙しく駆け回っていた。私の父方で言えば、研究者だった曾祖父も、エンジニアだった祖父・父もしばしば海外出張に出ていた。しかし、その後、グローバル化の弊害が指摘され、世界経済がブロック化する中で、人々の移動範囲も自国内、せいぜいブロック内に限られるようになってきた。

現在の世界は5つほどの経済ブロックに分割されている。最大は中国とロシアを中心メンバーとするユーラシア同盟で、ユーラシア大陸の大半を占め、世界人口の約1/4を抱えている。ユーラシア大陸の残りは欧州共同体で、かつては先進地帯だったが、人口減少が進み、衰退の一途だ。今なお人口が増大を続け、経済成長を続けているアフリカ経済共同体をどうやって取り込むか、ユーラシア同盟としてのぎを削っている。

ラテンアメリカ連盟も経済は堅調だ。メキシコなど、かつては米国に人口が流出して国内経済の成長の足を引っ張っていたが、米国への移民が止まったのが幸いして、自国内での経済活動が活発化した。問題はむしろ米国だ。唯一の超大国の座から滑り落ち、内向き志向の孤立主義に戻って久しいが、世界の大国の一つであることに変わりはない。しかし、一つの経済ブロックとしては小さすぎ、低成長にあえいでいる。

日本は自由貿易体制堅守を標榜してユーラシア同盟に加盟せず、ブロック経済化の波に乗り損ねた。結局、同じ志向のインド・オーストラリア・ニュージーランド・カナダなどともに、欧州共同体を離脱した英国を含めたニューコモンウェルス・オブ・ネーションズ、すなわち「新諸国連邦」を結成した。コモンウェルス・オブ・ネーションズの旧称であるブリティッシュ・コモンウェルス（英連邦）に引きずられて、「新英連邦」という邦訳が使われたこともあったが、日本政府が「日本が英国の旧植民地と誤解されかねない」と嫌がって、新諸国連邦、略して「新連邦」の呼称が定着した。米国は正式には加盟していないが、イギリスやカナダとの古くからの密接な関係もあり、準加盟国の扱いを受けている。

考えてみると、節目は2071年の世界貿易機関(WTO)の機能停止にあったのだろう。関税率や輸入数量枠の設定が自由となり、急速に世界経済のブロック化が進んだ。

国際政治面でも国際連合の存在が形骸化し、各ブロックからそれぞれの代表2カ国が出て討議する毎年のG10サミットが国際政治を動かしている。

ユーラシア同盟からは、中国とロシア、欧州共同体からはドイツとフランス、アフリカ経済共同体からはナイジェリアと南アフリカ、ラテンアメリカ連盟からはブラジルとメキシコ、新諸国連邦からはイギリスとインドが、それぞれ代表となっている。なお、米国はオブザーバー参加である。

日本は新諸国連邦の代表の座を狙っていたが、新参者の悲しさ、当然のようにイギリスに先を越され、アジア地域の代表席はインドに奪われて、国際政治の表舞台には立てなくなった。

秋深き隣は何をする国ぞ

## 2127年12月1日(月)

今日から12月。暦の上での寒の入りはまだまだ先なのに、とても寒い。

夏の頃に太陽エネルギーの活用策としては太陽光発電よりは太陽熱利用は主流になってきており、民家の屋根からも太陽光パネルを太陽熱温水器が追い出しつつある、と書いた。

しかし、太陽の日射不足のため、太陽熱利用だけでは熱需要に十分応えられず（特に日本では日本海側で冬の日射が乏しく、世界的にも高緯度のシベリアやカナダでは冬の太陽に期はできない）、かといって石炭などの化石燃料はますます貴重になっているので、第三の熱源が必要になっている。

最近のニュースで関心を引いたのは、超小型の原子炉を各家庭に設置して、電気と熱の双方を利用（熱電併給）するマイクロ・ニュークリア・コージェネレーションという技術。メーカーでは、「ニューコジェン」とか「エネクリア」といった商品名で売り出す予定とか。

都市ガスやLPGを利用した熱電併給（コージェネレーション）は大昔からあるが、石油も天然ガスも枯渇しつつある現在、燃料を原子燃料に切り替える必要があるという。この技術自体は大昔からあり、小型炉を使って一都市やコミュニティ単位で熱電併給するシステムはシベリアやアラスカで実用化されてきているようで、安全性・実用性は実証済みという。原子炉からの排熱は比較的低温なので、家庭ごとに配備したほうが効率的だそう。また、原子燃料は一度装填すれば3年は使えるようで、燃料はモジュール化されているため、簡単かつ安全に取り扱えるという。

そうはいつでも、住宅街のあちらこちらに放射性物質は存在しているというのは大丈夫なのだろうか。例えば、火事や地震で装置に損傷が生じても、放射線漏れなどは起きないのだろうか。何回かこの日記にも書いた曾祖父は、政府では原子力発電関係の仕事もしていたというので、生きていたら意見を聞いてみたいくらいだ。

案の定、インターネット上では反対意見もたくさん出ていて、対案の一つとして地熱利用が提案されていた。地熱といっても、火山活動による深層からの高温の地熱ではなく、浅い地層の地中熱を取り出して、大気ととの温度差を利用するというもの。これなら事故の恐れもなく安心に思うが、設備費用がまだまだ高い由。ただし、設備費用というものは大量導入による大量生産で大幅に引き下げが可能なはずで、前世紀初めに高価だった太陽光発電設備があつという間にコストダウンした事例もある。原子力はやはり大型炉か中型炉で集中的な発電に使い、家庭用の熱供給は太陽熱か地中熱を利用したほうが賢明と思うが、どうだろうか。

心身の老化防止のため、散歩を日課にしているが、11月に入ってから厚手のコートが手放せず、このごろは帽子も必要で、帽子もかぶらずに零下前後の気温の中を歩いていると頭が痛くなってくる。この先は、耳あてのついた毛皮の帽子が必要になるかもしれない。ロシアや中国からの輸入品では、関税が高くなるだろうか。

初時雨人は小蓑で足りぬなり

これはむしろ川柳で、猿にも笑われるかもしれない。

## 2127年12月31日(水)

大晦日を迎えた。久しぶりに都心に出て、新年に備え、いくつか買い物をしてきた。何でもインターネットで買えるご時世になったが、大事な買い物は、やはり自分の眼で直に見て、触ったり試したりしてからでないと気が済まない。

今の都心は、建物の高さを50メートル以下に抑える制限がかけられているため、ほとんどのビルが14階建てに揃っており、壁面の色調にも規制がかかって、落ち着いたきれいな街並みが続いている。

いつか再来すると恐れられていた関東大震災が、ちょうど100年後の2023年に発生し、今回は直下型地震だったので、被害は東京に集中して、東京大震災と名付けられた。マグニチュードが予想よりは小さかったので、多くの死傷者は出さずに済んだが、それでも当時林立していた超高層ビルやタワーマンションには大きな損傷を生じた。

耐震設計とはいえ、高層階の揺れは尋常ではなく、室内で家具の下敷きになったり、ベランダや窓から外に放り出されたりして、犠牲者が出た。防火・消火設備も万全と言われていたが、完全には機能せず、出火して炎上したビル・マンションも多かった。消防のはしご車が届かない高層階では、下に逃げられないため屋上に逃げ、しかし炎のため救助ヘリコプターが近づけず、焼死者も出てしまった。建物が無事な場合でも、しばらくは電気が通じずエレベーターが使えなくなったので、高層階の住人は階段を下りて地上に出て、避難所生活を強いられることとなった

もちろん、私自身が生まれる前の災害だが、その後、学校の防災教育などで当時の記録映像を厭となるほど見せられたので、東京大震災の惨状は眼に焼きついている。

「地震国の日本で建築物の高層化を進めるのは危険」と政府もようやく気づき、建築基準法を改正して、消防はしご車が届く限界の50メートルで、ビル・マンションの高さ制限をかけることとなった。多くの高層建築が既存不適合として残されたが、人々が高層階の危険を身にしみてわかり、15階以上のフロアでの勤務や居住を拒否したため、耐用年数内の高層建築では、15階以上を撤去する減築が進んだ。耐用年数に近づいていた高層建築は解体され、14階以下の中層建築に生まれ変わった。その結果が現在の都心の街並みである。

日本の人口が減少を続け、東京の人口も減り始めていたので、居住面積の減少は望ましいことでもあった。ピーク時には日本の人口の1割にあたる約1200万人のメガロポリ



スであった東京も、現在の人口は約350万人で、三分の一以下に減少したが、それでも日本の人口の1割という比率は変わっていない。

24の特別区（元は23だったが、「錦糸町が23区内なのに、吉祥寺が23区外ではおかしい」という運動が起き、武蔵野市が武蔵野区として特別区に加わった）の区域内だけで、都民への住宅を十分に供給できるので、特別区の外は住宅の新築が原則として禁止され、広大な農村地帯に戻っている。

実は我が家は最初に曾祖父が自宅を建てた場所であり、当時の23区の境界ぎりぎりにある。曾祖父の宅地選定のおかげで、建て替え、建て替えで代々住み続けることができ、ありがたい限りだ。今度、多磨霊園の墓にお参りする際には、あらためて感謝してこななければならない。

さて、61歳の誕生日も過ぎ、「2127年古希老人日記」も今日で終わりである。来年の日記は「古希プラス・ワン日記」とでも題そうか。すっかり呆けて「おめでたい人」になってしまい、何もわからなくなるまでは、日記を付け続けたいものだ。

おめでたき人にも入らむ老いのくれ

最後まで駄句で締めくくることにした。

主要参照文献：雲英末雄・佐藤勝明訳注『芭蕉全句集』、角川文庫、2010年。